

Dialogue

Tohoku Earthquake and Tsunami and Vision of Environment and Engineering

東日本大震災と環境・工学のこれから

◆話し手◆

内山 節 *takashi UCHIYAMA*

哲学者／1950年生まれ。都立新宿高校卒業。『共同体の基礎理論』『〈里〉という思想』『時間についての十二章』『哲学の冒険』ほか



内藤 廣 *hiroshi NAITO*

建築家／1950年生まれ。1976年早稲田大学大学院修士課程修了、吉阪隆正に師事。1981年内藤廣建築設計事務所設立。2001年より東京大学大学院社会基盤学専攻助教授、2003年同教授、2010年副学長、2011年3月に退官。代表作に「海の博物館」「島根県芸術文化センター」ほか。主な著書に『建築のちから』ほか



●聞き手●

高口洋人 *hirotō TAKAGUCHI*

(早稲田大学准教授／編集委員会委員)

林 憲吾 *ken-go HAYASHI*

(総合地球環境学研究所プロジェクト研究員／編集委員会委員)

糸長浩司 *koji ITONAGA*

(日本大学教授／編集委員会幹事)

中谷礼仁 *noribito NAKATANI*

(早稲田大学准教授／編集委員会委員長)

東日本大震災

高口——今回は、東日本大震災以降、原発の問題を含めて、いろいろところで起こっている要素還元主義的な取組み方の限界と、それに対してわれわれはどのようにまちづくりや建築の設計をしていくのかということをご聞きしたいと思っています。最初に内山先生から、今お考えになっていることを率直にお話してください。

内山——今回の大震災では、建築の前に、まず「地域デザイン」が大変重い課題になっていると思います。私の友人に、島山重篤さんという漁民の方がいます。彼は気仙沼の近くの唐桑町で、「森は海の恋人」と言って、山に木を植えてきました。彼が、地元紙のインタビューで「それでも、海を信じて生きる」というメッセージを出

していらっしゃるのです。日本は自然災害が多い国ですが、災害にあった人々は、そういう自然を信じる生き方をしてきたのです。しかし、そのなかで教訓もありますから、家は高台につくるなど、地域は教訓を残しながら、それでもやはり大地を信じて生きるというかたちでどこかで踏ん切りをつけてきたと思うのです。

しかし、原発というのはまったく違う事態です。「それでも原発を信じて生きる」などとは言えない問題です。津波の被害が今回は非常に広範囲で甚大ですから、「それでも自然を信じる」ということも大変なことではありますが、これから地域デザインをするにしても、人々の伝統的な災害の乗り越え方をある程度基盤に置いてもう一度頑張ってみようということが出来る災害と、まったくそれができない災害というものが、今、日本では同時

に進行しています。

それから、もうひとつはこの二つのことが影響しながら、今回は日本人皆が被災者になってしまったところがあります。精神的に被災した人もいるでしょうから、具体的な被害がない地域も含めて、もう一度デザインのやり直しをしなくてはならないところへ、否応なく迫られると思います。

内藤——まさにそのとおりでと思います。今、自分自身に言い聞かせているのは、とにかく痛みを感じながら事態をまじまじと見て、忘れないようにすることです。もちろん被災地への知恵も大事だし、その行動は素晴らしいことだし、調査も結構です。けれども人は忘れやすいですから、いずれこれも日常意識のなかにのみ込まれていく。阪神・淡路大震災のときより規模が大きいので、それだけ時間はかかるかもしれないけれども、いつか忘れる。むしろそれを忘れないようにすることこそが大事だと心に決めて、いろいろな情報に接しています。

それと、復興についてですが、まったく新しいことを決意しなければいけない時期にきたのだと思います。今われわれに襲いかかっているのは初期ダメージで、これが心の底の深いところをどうやって変えたかというのが問題です。この雑誌が出るのが7月初めだから、その時期に何が起きているのか気になります。私はいつも、次ではなくて、次の次には何が来るか、ということを考えてのですが、経済の問題がかなり色濃く出てくると思います。これをどう乗り越えるかです。

内山——今の社会では、いろいろなサービス業が弾力性を持たない産業になってしまっています。今後東京でもどうしたってモノやサービスの需要は減りますから、いろいろ厳しいところが出てくるでしょう。そうした場合でも昔だったら、皆の賃金をしばらく半分にしてなんとか頑張ろうというようなことができたと思うのです。しかし、現在の経済の仕組みというのは弾力性のないものになってしまっていて、雇用や賃金もぎりぎりの状態に置かれている人たちを大量に生んでしまった。また、そういう人たちが都市社会のなかで助け合う構造も十分にあるとは言えません。そういうときに助けてくれる大きな力というのは自然の方にあたりするのですが、都市は自然に助けてもらうことができない地域でもある。人間同士の助け合いにも限界がある。そういう地域のなかでこれから皆がどういうかたちで分かち合えるのかというのは非常に大変な事態になってくる可能性があるでしょう。

内藤——先日、法制度の専門家と話していたら、被災地

の復興は建築基準法だとか都市計画法だとか、いわゆる日常的なことを扱う法体系では役に立たないのではないかと、という話を聞きました。やはり、民法まで踏み込まなければならない。われわれの日常を形づくっている基本的な社会システムまで立ち入らないと、今回の先は見えてこないということです。しかし、そこまでの改革はかなりの痛みを伴うでしょうから、今の豊かな日本では難しいかもしれない。どうやっても食えないといったときに、本当のリアクションが出てくるのではないかと。NPOも食えなければ助けに行くこともできませんから。ゆとりのある人が困った人を助けに行くというのは、ゆとりのある社会です。しかし、全員にゆとりがなくなる可能性もあります。それが次のステップかなという気がします。

内山——僕は、友人たちと何年か群馬県の片品村で哲学塾というのをやっているのですが、片品村に原発被災者の方が1,000人くらい避難してきて、哲学塾でも3カ月間無償で受け入れています。今、地元の尾瀬高校の生徒たちがボランティア組織をつくって、マンツーマンで彼らのお世話をしています。幸い尾瀬高校は、もともと地域学や自然学をやっている公立の特殊な学校でして、動ける学校なので、その人たちが一生懸命やってくれているわけです。しかし、そろそろ新学期が始まりますから、昼間活動ができるのかどうか課題です。

高齢化した社会が大規模に被災するというのも、今回初めての経験です。高齢地域の復興とは何なのか。国もあまりお金がないのでどこまでできるのかわかりませんが、お金さえ使えば道を直したり、インフラをつくり直したり、場合によっては家を建ててあげることもできるかもしれません。しかし、それが復興につながらない可能性があります。今までは集落機能があったので、そのなかで高齢者がひとりでも暮らしていたのですが、そういった目に見えないインフラのようなものが壊れてしまえば、仮に無償で新しい家をつくってくれたとしても、住めない人が出てきてしまう。そのような地域が復興するにはどうすればいいのか。

内藤——どうしていいのかわかりません。おそらく国の価値観そのものを変えなければ駄目だということにまで立ち至っていると思うのです。われわれの前の世代が戦後50年、額に汗して築き上げてきたこと、政治も経済も技術も、そして学問もそうですが、そういうものが全部、今、まな板の上にのせられているような気がしています。ここは建築学会なのであえて言うと、建築というのは人間の日常を中心に形づくられるもので

す。その日常が思わぬ方角から問われている。戦後50年営々とつくってきた社会システムに、建築あるいは建築家も乗ってきた。それが今見直しを迫られているのだと思います。

内山——今回危機って何だろうと考えたのですが、それは、連鎖的なシステム崩壊だろうと思います。危機というのは、古代にも中世にもありましたが、そのときにはそこでの人間の生活と労働のシステムの崩壊が、危機だったわけです。これは身体でも受け止められるし生命でも受け止められるし知性でも受け止められる、そのすべてが手を伸ばせばそこに触れるような形のシステム崩壊です。ところが、今回の危機というのは人間の手の届かない巨大システムの崩壊の連鎖です。管内の電力システムにガタが来て、電力不足のため電車の運行中止が起き、交通システムにガタがくる。巨大システムのひとつが崩壊すれば連鎖崩壊を起こしてしまうわけですね。かつての危機と違って、人間が触知できないシステムが次々に連鎖を起こして壊れていくという相互依存関係になっています。そして、人間たちがそのシステム崩壊のなかでピンチに立たされたわけです。実はそれを救済できるのは「助け合おう」とか「支え合おう」という非常に素朴で原始的な人間の行為です。ですからシステムの大規模崩壊が起こったときに、それを救済する手段はシステム側にはないということです。仮にこの後、核分裂の可能性がなくなって新規の放射線も出ないという状態まで福島を持っていったとしても、システムの復旧はもうできないわけです。原子炉を復旧させることはできないでしょうけれど、その周辺地域社会のシステム復旧というのも、少なくとも当面はありえない。もちろんひとつの意見としては、経済を含めて日本のシステムをどう再建するのかという議論が始まるのですが、僕はそれに乗ってはいけないという気がしています。国とは何か、政治とは何かというより、果たしてそのような巨大システムがこれから有効に機能するのかということを直視しなければいけないという気がします。

高口——復興ということでここ数カ月の間に莫大なお金が使われますよね。

内藤——復興はある種のバブルです。経済学者はおそらく形を変えた内需拡大と言うでしょう。

高口——そうすると今のシステムに合わせた世界がまたつくられていく……。

内藤——そこが本当は問題ですね。復興の巨大な予算を有効な手立てとして使えるようになるのか。その戦略がこの国はいまだ立てられていないでしょう。非常時に弱

い。うっかりすると全部省庁に割り振って紋切り型で「10メートルの堤防を15メートルにしましょう」とか、そんな話になってしまう。そこにはもう少し深い意味での復興のあり方というものがあるはずで。歴史も文化も全部含めた復興をしなければならぬはずで。しかし、国や行政に文句ばかり言っても仕方がない。一般の人の理解を得るには、いい事例を一刻も早くつくることだと思います。それが一番わかりやすいし、遠回りのようで近道だと思います。

復興というのは外発的復興と内発的復興があって、国にできるのは外側からの半分だと思います。基本はそこにいる人が内側から復興するという精神の問題が一番大切で、そこはやはりどうしたって文化の力が必要だと思います。最終的な復元バネというのは文化でしかないと思います。こここのところ東京大空襲の写真をよく見ているのですが、その光景は陸前高田とほとんど同じです。大空襲では一夜にして10万人が死んでいるわけですが、あの悲惨な状態から60年かけてここまで復興できたということです。なぜ復興しえたかということを考えて、それまでにわれわれが積み重ねてきた文化、例えば「できるだけ正しく日本語を喋ろう」とか「日本語を土台にちゃんと考えよう」といった思考のパラダイムが濃密にあって、それが最終的に復元バネになったのではないかと考えています。やはり復興の核は文化であるべきです。それがなければ、いくら立派な防潮堤やまちをつくっても意味がない。

原発の問題

内藤——三陸で起きたことが津波による「物理的な突然死」であったのに対し、原発で目にしているのは、放射能による「緩やかな死」です。つまり自然災害という形と人為的な放射能汚染という形で、極めて異なる2種類の死の様態にさらされているのだと思います。そのことが、僕らの頭を少し混乱させています。

内山——今回、われわれが心の奥の方で受けたダメージあるいは衝撃というのは見極めにくいものだろうと思います。原発の危機に遭遇して、「こんなことが起きるのか」「これは大変なことになった」というのは、知性の領域における衝撃です。しかし、人間は同時に身体にも衝撃を受けています。さらに、もうひとつ奥の方で生命それ自体にも衝撃を受けていて、それらが、同時に進行している。今回被災された方というのは、そういう問題がきつ出るでしょうが、われわれもそのなかに大なり小なり

り巻き込まれている感じがします。特に原発については「緩やかな死」とおっしゃいましたが、知性の領域で緩やかに危機を感じ続けながら生きるしかなかったときに、身体や生命はどういう反応をするのだろうかと思えます。仮にこの後、予想される最良のコースを辿り、数年後に政府が安全宣言をして、あの地域の人たちが家に戻って来られたとしても、おそらくその感情はまったく消えることはなく、緩やかな危機を感じながら生きる、という生き方に人間を変えていこうという気がします。

糸長——私は飯館村の原発被害の現場に関わっているのですが、まだシステム崩壊中の状況がずっと続いています。システムが弱っているから、「はい、さようなら」と言っていられないのが今の現場であって、まだ「災害中」なのです。災害中のなかでどうするか、何ができるかを考えないといけない。政府が的確に情報を開示しないから、京都大学の原子力関係の人たちとともに現地調査を実施して、われわれとしてはそのデータを開示し、的確な避難行動の提案をしてきています。今回の事態は、システム崩壊ではなくて、情報を開示し迅速な避難行動を促すというシステムがあまりにも脆弱だったわけです。それを修復するためにどうするかということを考えたうえで、システム転換を行うということと言わないと、現場殺しなんですよ。

内山——日本の戦後のシステムが崩れかけてきたと思ったとき、矛盾する二つの思考を持っていないと対応できないと思いました。例えば、今大学を出ても安定した雇用がないという状況ですから、「きちっと雇用しなさい」ということを言っていけないと、若い人たちは不安定就業ばかりになってしまう。これがひとつの思考ですが、ここで終わるわけにはいかない。もう一方では、労働とは本当にこれでよかったのか、雇用されればそれは労働なのか、という思考を持たないといけない。答えが時には矛盾してもいいから、二つの思考を同時に持つことが重要です。原発の事故が起きている以上、現実に対応しなければならぬことは間違いない。しかし、もう一方で、システムに依存した社会、特に原発というシステムに依存した社会をどうするのかという両面思考をやっけていなくてはならない気がします。

死生観に踏み込む

内藤——糸長さんの言われたことはわかります。災害が現在も進行しているなかで、東京のこんなところで何を

やっているのか、ということでしょう。でもそのことと、ここで意識を深め合うことはまた別のことだと思います。例えば、日本人の平均寿命を少し低くして考えてみるという話も、この先あるかもしれない。要するに死をどうやって扱うかという話です。それは少し引いた、現場から離れた所でしか見極められない。近代というのは永遠に死なないというイメージが前提になっているわけですが、60歳で死ぬということはどう考えるのかというようなことを、原発の問題が起きると考えざるをえないわけです。そのうえで、われわれは建築に向き合っているわけだから、建築はこれまでそれをどう扱ってきたのだろうか、ということも考えざるをえないのだと思います。それは自分自身も含めて。

内山——実は、昨夜4時ごろまでパソコンをいじって、亡くなった人々の供養をやろうという呼びかけをやっていました。4月24日に、思い思いの方法で皆で供養をしようと考えています。4月24日というのは49日の法要に合わせたのですが、信仰を持っている方は自分の信仰の方法でやってもらえればいいし、ない人はちょっと手を合わせればいい。追悼のコンサートや集いなどを持つ人がいてもいい。どういう方法でもいいので、いっぺん死者を皆で送ろうと。日本の伝統というのはもともと何か大きな災害や戦があったとき、それが終わればまず死者を送ります。戦のときには敵味方関係なく送るし、巻き込まれて死んだすべての生き物を送ります。さらに災害のときには大地が鎮まることを祈る。そうやってひとつのけじめをつけていたと思うのです。現在も僕らの気持ちが晴れない理由のひとつには亡くなった方をちゃんと送っていないということがあるような気がします。国葬みたいな儀式にするのではなくて、どんな形でいいから皆で送ろうと。その呼びかけを、メールの送り合いという形で広めようとしています。

死者というものを社会デザインのなかでどういうふうに関わり込んでいけばいいのかは考えなければいけないところだと思います。

内藤——先日、大学で退官前の挨拶で文学部長と話をしたとき、基本的には今回のことは文系とは無関係ではないという話をしました。通常で言うと地震災害と原子力災害ですから、これは工学系の問題ですが、そうではないと。つまり、今回は、死生観の問題に至ると。例えば、遺体が1万人も見つからないということがあります。亡くなられた方の何がしかあっての死生観というのが、われわれの社会の前提だったわけですが、遺体がない死生観というのをどうつくるかということになるでしょ

う。実は東京大学の文学部と医学系が混ざって死生学というものをやっています。これは日常における死の問題が中心ですから、今回の問題とは種類が違いますが、医療も含めた死の問題をどう扱うかという助走はやっています。そういうものをどこまで活用できるかが大切です。

林——僕は、工学や経済学が、「死生」について考えることに可能性があると思っています。工学が20世紀を通して突き詰めてきたものは、原発のように、より効率的に最適な性能を一定の状態ですと発揮できることを目指した技術です。しかしそれは、一方でまったく弾力性がなかった。最近になってようやく歴史的な経験で培われた伝統的で柔軟な対応を、工学に取り込むという考え方が出てきましたが、工学のなかに、「死生」や「柔軟性」を考える姿勢があまりなかったのではないかと思います。

糸長——このあいだ、原子力の研究者に、「原子炉の廃炉学ってないんですか」と質問すると、「そんなことに興味を持つ人はいない」と言われました。それには、近代科学、技術学の持っている志向性に偏りを感じました。死の学というか、工学だってモノをつくれれば消えていくわけですから、そのときにいかに消えさせるかという「鎮守の学」がなければいけないと思いました。近代社会全体が廃炉というか廃墟をおさめる論理と理念を持っていないことだと思います。

内山——僕は小さいころから魚釣りをやっていたから、田舎の景色というのにはよさを感じます。それに対してビルが乱立しているところにはあまりよさがない。何が違うのかと考えたときに、死の空間がないのだと気がつきました。田舎には死の空間がたくさんある。それは、時にはお寺だったり、近所の家だったりするのですが、それは単なる法要の場所ではなく、それが奥の自然とつながって、死の空間になっている。それに包まれて人間の生の空間があるという感じなわけです。僕が高校生のときに新宿西口の開発が始まって、そこへ行って感じたのは、死がないということです。近代は、まちというのは人間が生きるところだと位置付けてきたと思いますが、人間だけではなく、いろんな生命が死ぬ場所がまちなのです。そのことを欠かさずまちづくりというのは、間違っていたのではないかと思います。

内藤——近代的な施策や国家的な予算執行というのは、すべて「蘇生のための施策」なんですね。まちは必ず蘇生しなければいけないという前提を建前上崩せない。もう少し違うシナリオとパラダイムを描かなくてはならな

かったけれど、誰も描かなかった。

内山——全体の流れとしては、もうすでに過去に戻るとい時代に入っていると思います。もちろん過去をそっくり再現するというわけではなくて、過去を受け継ぐと言い直した方がいいと思います。今回の災害で言えば、亡くなった人たちとわれわれがどういうつながりを持ったらよいかということですよ。

内藤——そこがないと現在が定義できませんよね。話が環境のことになりますが、ちょうど震災が起こる前に新幹線で雑誌を読んでいたら、異常に綺麗な原発の写真が載っていて、CO₂削減のキャンペーンが広告で掲載されていました。この10年、CO₂ということがすごく話題になってきましたよね。もちろんそれは正しいのだけれど、ドグマになってしまうと、世の中は大切なことを見落とすんだなと思いました。結果と数値とで追っかけ過ぎると、大切なものを見失うような気がします。その辺りのまともさというのも、これからの環境を考えるうえで必要なのではないかと思います。

高口——使用済み核燃料や放射性廃棄物をどう処理するのかという、未解決の問題は想定の外において、その想定の中だけではクリーンなんですよ。そこが問題とわかっているのですが……。

中谷——ただ「それはわかっているんだけど」と言ってしまうと終わると、それを発信するのは大きな違いですね。想定外というのは、さまざまなデータに、特に経済的効率やこれまでの惰性が組み合わさってできた「想定—常識」の外部なわけですから、ほんとうの外部と言い切れるわけではない。学会はその過去の組合せ方を明示することが必要だと切に思います。

学会のあり方と次の世代への貢献

内藤——そもそも工学自体の再編をやらなくてはいけないのではないかと。原発などを見ているとそう思えてきます。工学そのものが行政システムに乗っかって、その結果、細分化されたさまざまな委員会ができて、全体的視野を失ってああいうものが出来上がってしまう。当然工学のなかには建築と都市と土木も入っています。三つの学会に分かれて一体何をやっているのか、と社会からは見られるでしょう。分かれていても何かあれば皆ぱっと集まればいいのですが、それぞれの思惑と権力構造で動いていて機動性が低い。いずれ首都圏で起きてくることは、今回の災害のオーダーとケタが幾つか違うわけですよ。今の事態に対して何ができるかということを真剣に自分

のこととして考えるべきだと思います。

中谷——今日もニュースを見ていると、低レベルの放射性物質を含んだ海水が海に流された。インタビューされた方は、皆一様に困ったとか不安な表情を浮かべています。しかし奇異に思ったのは、その状態に対して「怒り」の感情を示す人が画面にまったく出てこないことです。その理由はわかりません。もし私が、過去に補償とも無関係な漁民であればもっと怒っていると思います。今日のお話も穏やかな諦観が主調です。私も、理工系の大学に籍を置き、かつ建築学会の編集委員長という立場をかえりみると、単なる「怒り」が弱まってしまうことを感じます。要は、私は私を取り巻くある特定の環境に関係していて、その結果がそのような諦観を持っているのではないかと思います。でも例えば、中世であれば一向一揆などで、ある共同体がより大きな共同体と対峙するという場面すらここ日本の場所ではあったわけです。この怒らないで耐えるという心性がどのように生まれ、今後それがどのようにこの環境・身体・死へと展開していくのかにこそ興味があります。

内山——私は知性・身体性・生命性と言いましたが、生命性の代わりに霊性という言葉も使います。これは鈴木大拙（1870～1966）の『日本的霊性』から来た言葉ですが、彼も知性でも身体性でもつかめない何か奥のものを霊性と呼んでいます。この三つがいろいろな関係性を結びながら生きてきたのが、もともとの人間の姿だったと思うのです。人間が持っている怒りというのは、身体がこれを許さないとか、生命はこれを許さないということに支えられていると思います。先ほど、昔は一向一揆をやったではないかと言われました。それはそのとおりだと思います。どういうことかと言いますと、そこに信仰があるわけです。日本の場合、宗教というよりも、生命の了解というものが日本の信仰であって、自然に手を合わせてそれが自分の生命の了解になるというようなものです。一向一揆も念仏を唱えながらやったわけですが、自然信仰に絡んだ阿弥陀信仰の人たちが決起しているわけです。その土地で生きる自分たちの生命の納得みたいなものが自然信仰・阿弥陀信仰を生んできた。そこで、犯せないもの、生命次元で受け入れられないものを持っていた。

内藤——その考え方で言うと、地震とか津波そのものは怒りの対象にはならないですね。しかし、その後の対応の人為的な部分に関しては、怒りの対象になる。原発に関しては僕らも当事者ということで、気持ちが複雑になります。環境問題全体もそういうところがあって、地球

環境を考えたときには、自分も加害者のひとりという複雑な気持ちを持つわけです。

中谷——第五福竜丸のときの人々の不安と怒りは何であり、どこに行ってしまったのだらうという気がします。あれは特定の政治的傾向に組織されただけのものだったとは思えません。

内藤——この前、伊東豊雄さんたちと話をしました。若者はボランティアに行かなければならない、助けに行きたいと思っている。ところが一方で設計事務所で目の前の仕事をしている自分がある。この二つに断層があると。つまり、人間としてということと、建築家としてということが切れているのです。その二つを関係付けられないでいる。伊東さんは、「昔はそうじゃなかったんだよね。それは建築界が歪んでいるからかもしれない」と言っていました。そうであれば、それを橋渡ししないとマズいよね、という話になりました。

最後に言いたいのですが、子どもはなんとしても守らなければいけないということです。津波にしる原発にしる、いずれの場合も、次の世代というものを強く意識しなければならぬと思うんです。次の世代を守ることだけは、皆の大きな合意として意識しないとダメだと思います。そうしないとこの国の未来はない。

内山——私は内藤さんとおおよそ同世代ですが、この社会をつくってきた世代に次の社会を語らせてもダメだと思います。われわれは大失敗をした。そのなかで一人ひとは、その大失敗に積極的に手を貸してきた人もいるし、抵抗した人もいるでしょうが、総体としてはこれだけ弱く無茶苦茶な社会をつくってきたということだけは確かだと思います。僕らのこれまでの蓄積を生かして次にいけど、という話ではないということです。「われわれは諦めました」という気持ちを出発点にして、何か提供できることがあれば貸しますよという、節度のある努力をやっていかなければいけないと思います。

内藤——ともかく若い世代に呼びかけたいと思っています。17、18から30歳までの人たちは、これから3、40年生きていくわけだから。その人たちに元気でいてほしいと思います。教育の現場に立っているとわかるのですが、若者たちはわれわれの世代の背中を見ているのです。それを忘れてはいけないと思っています。われわれが今どういう気持ちでどう考えているのかということを伝えないといけないと思っています。

(2011年4月5日、建築会館にて)